令和３年度　学校評価シート（青梅市立東小学校・東中学校）　（学校関係者評価）

＜学校経営方針の重点＞

１　学習指導の充実　　２　生活指導の充実（小学校）、生活・進路指導の充実（中学校）

３　情操教育の充実　　４　小中、学園との連携

項目	経営目標	本年度の重点	具体的な方策	評価	分析結果	改善策	学校関係者評価記入欄 評価	学校関係者評価記入欄 コメント	学校の見解と今後の方向性
１　確かな学力	確かな学力を身に付ける教育活動を推進する	指導方法の工夫、学習の見通しをもたせること、指導形態を工夫・改善などにより基礎的・基本的な学力の定着と伸長を図る	習熟度別少人数授業（中－英語）やＴＴ（小－国語、算数、理科、体育、中－数学、社会、理科、保体、美術、家庭、2・3年の一部授業）の充実を図れるよう打合せの時間を設ける。	B	A+B 評価 96%であるが、A 評価が 46%にとどまっており、目標達成に至っていない。	主体的に学習に取り組む態度の育成に努めていることが「分かる授業」につながるよう具体策を考える。	A	視覚的にも「わかる授業」を展開しており、学習環境を有効に活用して児童の取り組みも良好で意欲を引き出している。	児童生徒の授業態度は立派なので、より授業改善を推進し、主体的な態度の育成を通して、生涯学習の基盤をつくる。
			教え込む時間・自学自習で基本を習得する時間・課題に向き合う時間など単元を見通した授業展開を工夫する。	A	A+B 評価 100%であり、教員は単元を見通し、メリハリのある授業に努めた。	A 評価が 58%なので、不十分な部分がある。今後も単元指導計画の充実を図る。	A	特色ある授業展開に、学習基盤である課題解決能力、実践力、人間関係形成力での伸長が認められる。	単元指導計画を作成する際にコメントにある３つの力を育成する視点を導入する。
			新学習指導要領の「主体的に学習に取り組む態度」を養うため、課題の設定を工夫するとともにＩＣＴ機器を必要に応じて活用する。	B	A+B 評価 92%だが、A 評価は 42%である。ＩＣＴ活用には個人差がある。	ＩＣＴは手段であり、目的ではないが、有効活用に向けて研修を深める。	B	ICT の活用については導入段階でもあり、関連した研修への取り組みなど、今後に向けて大いに期待したい。	大型モニター（電子黒板機能付き）の活用が進んだので、更にＩＣＴの有効活用を検証する。
			特別な支援が必要な児童生徒の学校生活支援シートを作成するなど、個に応じたきめ細かな指導を実施する。	B	A+B 評価が 87%だが、A 評価が 54%で、個に応じた指導には課題が残る。	学校生活支援シートの有効活用について検証し、学力向上に生かせるようにする。	A	発達に応じた個別支援の取り組みの中で、寮からの要望に応え、学習意欲の向上に結び付いている。	個別支援については、今後も寮との連携を密にし、個々の学習意欲が高まるよう努める。
２　規範意識と社会性	規範意識と社会性をはぐくむ教育活動を推進する	挨拶・返事・言葉づかい・態度などの基本的な生活習慣の確立を目指す 進路学習を通して、望ましい勤労観・職業観の育成を図る	昨年度、作成した「ルールとマナーの覚書」の運用を通して、服装や挨拶など教員が共通実践を図り、生活指導を進める。また、不必要な情報交換をさせない指導を徹底する。	A	A+B 評価 100%であるが、A 評価は 58%であり、十分ではない。教員の理解に差がある。	覚書の成果は大きいが、項目が多いため、全てを頭に入れて指導していく難しさを解消する必要がある。	A	児童の接触や情報交換などに対する意識が高く、指導の成果が得られている。基本的な生活指導は学園支援の基本であり、認識を強めていきたい。	教職員の生活指導上の温度差を緩和する手段として成果を上げている覚書であるが、形骸化しないよう常に確認を怠らないようにする。
			「ルールとマナーの覚書」を活用し、児童生徒のセルフチェックを通して、常識や良識を養う。また、授業態度の振り返りも行う。	A	A+B 評価が 92%であるが、児童生徒への活用が不十分との認識と考える。	児童生徒のセルフチェックの効果的な活用とフィードバックの方法を工夫する。	A	児童の規範意識を育む上で生活指導を通して身に付けられる効果は大きく、生活経験の拡大にもつながる。	常識や良識を培うセルフチェックは有効なので、生活指導部を中心に計画的に取り組む。
			毎日の日記指導や個別指導を通して児童生徒理解を図り、いじめや他児からの威圧行為のない安定した学校生活となるよう支援する。	A	A 評価が 75%と高い評価だが、いじめはゼロと言えない状況である。	今後もいじめ対策委員会を中心に生活指導部が核となり、いじめゼロを目指す。	A	日常的に実践している児童との個別面談で児童理解が深まり、寮へのフィードバックも丁寧に対応している。	今後もいじめ対策委員会を軸に寮との情報共有をより充実させ、いじめ撲滅に取り組む。
			進路学習を通して将来、児童生徒が自立した社会生活を送れるようキャリアパスポートを活用し、キャリア教育を進める。	B	A 評価が 42%と最も低い結果である。進路学習に制限が出た影響もある。	職業体験等、制限下でも持続可能なキャリア教育の推進を工夫する。	B	退園後の生活支援について共通認識を持ち、自立を促し支えることで協働する効果は大きい。	キャリア教育を充実させ、児童生徒が自らの可能性を信じて、自立に向かえる力をつける。

３　豊かな心と体の健康	豊かな心と体の健康をはぐくむ教育を推進する	道徳授業等の工夫・充実、また総合的な学習の時間（小学校）や自立の時間（中学校）における福祉体験活動・自然体験活動・体育的活動などを通して、豊かな心と体の健康をはぐくむ教育を推進する	いのちの日や道徳科の授業、更にＳＯＳの出し方教育を要とし、体験活動を通して生命尊重の教育を推進し、自他の命を大切にする心を育てる。	A	昨年度より、A評価が多くなり、生命尊重の教育の充実に一定の成果があったと考える。	今後も教育活動全般を通して、生命尊重の教育を推進する具体策を念頭に入れ指導していく。	A	児童の状況や傾向、特性に合わせた教材を精査し、年齢相応に学年ごとにテーマを決めて取り組んでおり、児童の理解も進んでいる。	道徳の授業を充実させるとともに、校外学習を通して、自己有用感を高めるアプローチを展開する。
			ものづくりやおしゃれ村での栽培活動（中１を除く）・自然体験や福祉体験など小学校・中学校各学年の発達段階に応じた体験活動を計画的に実施する。	A	A+B 評価が 96%となった項目で昨年度と引き続き高い評価となった。	おしゃれ村・ものづくりは準備段階が大変であるが、福祉の先生の尽力が大きく、成果を出せている。	A	自然と触れ合う中で、児童個々の発達や特性に応じた体験活動が出来ている。福祉担当との更なる連携を強めていきたい。	福祉の先生から学び、本校の特色の柱である自然体験や福祉体験をより効果的に推進し、児童生徒の喜びにつなげる。
			新型コロナウィルス感染症予防対応を軸とした運動会やクラブ活動を推進する。また、教育相談（例えば担任との面談）等を通して、心身の健康の増進を図る。	A	A+B 評価 100%、A 評価 75%と高い評価となった。厳しい状況下を乗り越えるための努力を感じている。	今後も感染予防に努めながら、その都度、状況を鑑みながら、最善を尽くし、運動会やクラブ活動をおこなう。	A	感染症拡大防止の徹底を進める中で、成長に必要な経験や活動機会を保障し、一体感を持って健全育成に取り組んでいる。	感染対策は不十分な部分もあるが、教職員が協力して取り組んで来た。今後も児童生徒の健全育成を目指し、工夫しながら教育活動を進める
４　小中・学園との連携	小・中および学園職員と連携・協力した教育活動を積極的に推進する	小・中学校および学園職員との児童生徒の情報交換を密にして、連携・協力した指導を行う	児童生徒の問題行動について、日常的に寮と情報交換を行うとともに、学寮会を充実させ、連携・協力した指導の充実を図る。また、児童生徒の善行や頑張っていることなどを寮と共有し、双方で誉め、自己有用感を高める。	A	A+B 評価 100%、A 評価 75%と高い評価である。11・12 月には寮で昼食をいただく機会に恵まれたことは成果に繋がった。	学校生活サポート会議の立ち上げについて、学園からご協力をいただき連携について支えていただいた。今後は更に児童生徒の善行を共有する。	A	課題を抱える児童の日常的な情報交換や収集、支援方法の共有について十分なやり取りが出来ており、効果的な支援に結び付いている。	学園のご厚意のもと開催した学校生活改善サポート会議は有効な手立てとなった。今後も学園との連携を密に図り、児童生徒の善行の共有も推進する。
			月に一度の「授業公開週間」や日常の授業参観を通して、学園に児童生徒の実態を把握してもらい、意見や感想を改善に生かす。	B	A+B 評価が 100%、であるが、A 評価 46%である。児童生徒の様子がどの程度、伝わっているかの検証が難しい。	授業公開週に限らず、学園の先生が気軽に教室に入り、児童生徒の様子を見られるよう雰囲気作りに努める。	A	授業参観の活用は学園側の課題であり、授業公開週間に限らず、授業の様子を観察できる雰囲気は作られている。学校生活改善サポートチームの取組に生かされている。	授業参観を通して、学園の先生と共通理解を図ることは重要である。普段から積極的な声かけを励行し授業を見ていただるよう努める。
			児童生徒について情報交換やケース会議等を実施して、寮と学校が共通理解のもとで指導に当たり、互いに着地点を見出しながら課題解決や児童生徒の育成を図る。	A	A+B 評価が 100%、A 評価も 67%であった。学園の先生方の目線と遊離していないことを望む。	今後も学園の先生方との報連相が円滑に進むようコミュニケーションを大切にしていく。	A	自立支援と課題解決に向けて学校からの情報や支援は大変有用である。共通理解について、より効果的な取り組みを推し進めていきたい。	学園との報連相は、全ての教育活動において、潤滑油である。今後もより効果的な取り組みを模索し、改善していく。

補足…学校教職員による「自己評価」の仕方　４段階評価　　Ａ：目標達成、Ｂ：ある程度達成、Ｃ：もう少し、Ｄ：できなかった

○４段階評価　　Ａ：目標達成、Ｂ：ある程度達成、Ｃ：もう少し、Ｄ：できなかった
を基準として、校内で教職員一人一人が学校を評価したものを集計した。
上記の個人評価中のＡ～Ｄの割合をもとに次のように学校としての評価をまとめた。
Ａ　…　全体に対するＡ＋Ｂの割合が 90%以上かつ全体に対するＡの割合が 50%以上
Ｂ　…　全体に対するＡ＋Ｂの割合が 70%以上
Ｃ　…　全体に対するＡ＋Ｂの割合が 70%未満（全体に対するＣ＋Ｄの割合が 30%超）
Ｄ　…　全体に対するＡ＋Ｂの割合が 50%未満かつ全体に対するＤの割合が 20%以上
（全体に対するＣ＋Ｄの割合が 50%超かつ全体に対するＤの割合が 20%以上）
（ただし、全体に対するＡ＋Ｂの割合が 70%以上であっても、全体に対するＤの割合が 20%以上の時は、一段階評価を下げてＣとする）